

(一) 次のA・Bの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A 坪内逍遙は、小説を書くに際して必ず自己の小説理論に従って書くとした。これは、批評にあたっても同様で、必ず自己の批評の基準を示してから行う。「梅花詩集を読みて」は中西梅花の『新体梅花詩集』（明治二十四年三月）の批評であることは勿論だが、そこには逍遙の詩歌批評の基準が示されており、それが詩歌における没理想論すなわちドラマとしての詩歌論でもあるわけである。それではドラマとしての詩歌とはどういうものであるうか。それを見るためにはここでも逍遙の認識法における最大の武器である分類に煩雑ではあるがとりあえずは従わざるをえない。詩歌を次のように分類する。

詩人の歌う世界は「心の世界」（虚の世界・理想）と「物の世界」（実の世界・自然）とである。前者は「叙情詩人」、「理想家」であり、後者は「世相詩人」、「造化派」である。叙情詩人は「我を尺度として世間を度」るものである。その作がすぐれたものであれば「作者著大にして乾坤を呑」むほどのものとなる。そのため、叙情詩人には「理想の高大円満」であることを望み、その作には「作者の極致とする所」が常に躍然と飛動することを望むべきである。一方、世相詩人は「1」ものである。その作がすぐれていれば「造化活動して作者其間に消滅す」るものである。この意味で「造化派」である。そのため世相詩人には「理想の全く影を藏して単に世態の著しからんこと」を望み、その作品には「作者の影全く空し」いことを望むべきであるという。この「世相詩人」の概念は、近松論の世話物、小説論の人間派とほぼ同じものである。それにドラマの内実が明確に没理想論でうめられていきつつあることも知られる。〔イ〕

中西梅花は「a 詩人とされるので、b 詩人についてはこれ以上詳述はされないが、その両者の作詩法を比較して、前者は「単純にして強ち偉大なるを要せざる」とし、後者は「多般の大技量を要すべき」であるとしているところに、逍遙の力点が「c 詩人にあることが知られる。このように作詩法に難易があるのは、叙情詩人は「懷抱の主観相（観念）を有形にして―靈活に描写」すれば足りるが、d 詩人は「全く自我を脱して各種の性情を靈活」しないといけないからであるという。逍遙のいう作詩法の難易は必ずしも的確な把握とはいえないが、これはやはり「e 詩人の我の解脱の困難性を強調したいからであらう。我の解脱というものが、ドラマの本質であり、没理想論を支えている論理であるからである。ところで以上の分類には、演劇論と小説論とは明らかに異なる点があり、時代物・固有派に該当するものが設けられていないのである。〔ロ〕

もし詩歌において、時代物・固有派に当たるものを採すとなるとそれはいわゆる叙事詩である。しかし逍遙は叙事詩は韻律のある小説として詩歌には入れない。そのため二派のみとなり、理想詩人にあたるのが小説の折衷派であり、世相詩人が人間派である。詩歌が主観に基づくものという前提があればこの二派で充分なのであらう。しかし、世相詩人の具体的存在として、ホーマー（ゲエテ、シェークスピアなどと共に）があげられているところを見ると、いわゆる叙事詩の分類は曖昧さを残すといえるが、これはジャンルでは考えず、逍遙がドラマの概念で考えるからである。〔ハ〕

逍遙がドラマの詩歌（世相詩人）として日本の具体的な作品を挙げないのは勿論それが存在しないからであるが、それでは理想詩は存在するののかという点これも理想詩人ないしは理想詩の形態は存在するが具体的な作品は存在しないと考えている。理想詩の理想的な作品は前述のごとく、乾坤を呑むほどの高大円満なる理想があらわされているものであるが、もし乾坤を呑むほどの理想詩があれば、それは理想が全く作品中に消滅して造化及び世間相を写す「世相詩」と同じものになってしまう。なぜなら、逍遙の認識では、主観が客観と一致するのは主観が客観に埋没するないしは主観が拡大されて客観を包みこむ場合である。とすれば、理想詩も世相詩もその極致は同じものであるということになるからである。いずれにしろ、主観をそのまま歌う詩歌は逍遙には認められないことになる。詩歌がその主観をそのまま歌うのはいわば常識であるが、逍遙はこのような詩歌は差別相のみをもち平等相をもたないゆえをもつて斥けるのである。いわゆる没理想論が、たとえば鷗外のハルトマンのような美学に対する場合、いかにも不可解なものとなるのは、主観主観そのものを美として位置づける論理をもたないからである。文学の中で美学の対象になり易いのは詩歌であるが、逍遙の論理は詩歌の籠絡に関してはかなり微力である。このような詩歌における没理想の観点から、日本の伝統的和歌は差別相のみをもつものとして、一方、中西梅花は平等相のみをもつものとしていずれも批判される。〔ニ〕

それによると、和歌は「一身の哀歎（神祇釈教悉無常の感）」を詠うにとどまり、「現実を解脱」して「形而上の人間・造化」を詠うに至っていない（其現実象に拘々として大虚象を知らざる）と批判される。このような和歌批判は無茶といえこれほどの無茶なものもないだろうが、このような批判となつたのは文学の理想形態であるドラマによって和歌を批評しようとしたからである。ドラマというものが主観を客観に没することによって普遍性を得ようとするものである。詩歌のような主観的主情的なジャンルに対してはそのジャンルの特性自体を否定するものともなりかねないものである。〔ホ〕

（石田忠彦『坪内逍遙研究』による）

注 没理想論……明治中期に森鷗外との間で行われた論争で、坪内逍遙が文学の没理想性と記述による帰納的批評を説いたことを踏まえている。

ホーマー……古代ギリシアの詩人ホメロス。

ハルトマン……鷗外が没理想論争で援用したドイツの哲学者。

I 詩人の筆に上る世界二ツあり、心の世界と物の世界となり。甲は虚の世界にして理想なり、乙は実の世界にして自然なり。理想を宗とする者は我を尺度として世間を度り、自然を宗とする者は我を解脱して世間相を写す。前者は総称して叙情詩人といふべく、後者は総称して世相詩人といふべし。前者能く大なることを得ば、或は天命を釈し得て一世の予言者たらん。後者能く大ならば、或は造化を壺中に縮めて長永に不言の救世主たらん。理想家の作の大なるには作者著大にして乾坤を呑み、造化派の作の大なるには造化活動して作者其間に消滅す。されば叙情詩人には理想の高大円満ならんことを望むべく、世相詩人には理想の全く影を蔵して単に世態の著しからんことを望むべし。又太だ小ならば二者共に現在を離れ得ずして、叙情家は一身の哀歎を歌ひ世相派は管見の小世態を描かん。今大小を混じて例を挙げば、前者はダンテの如くマアロウの如くミルトンの如くカーライルの如くバイロンの如くウラーツワースの如くブラウニングの如く、後者はホーマルの如くシェークスピアの如くギョーテの如くスコットの如くエリオットの如し。要するに理想派の諸作には作者の極致とする所躍然として毎に飛動し、造化派の傑作には作者の影全く空し。叙情詩人の大なるは猶雲に冲る高岳のごとく弥々高うして弥々著しく、世相詩人の大なるは猶辺無き蒼海のごとく弥々大にして弥々茫々たり。前者は猶万里の長堤のごとし、遠うして更に遠しといふとも詮するに路破しがたきにあらず。後者は猶底知らぬ湖の如し、深うして更に深く終に其底を究む可らず。是を二者相異の要点とす。

II 情ら皇国の節奏文を案ずるに、上は短歌長歌より下は連歌俳諧謡曲浄瑠璃に至るまで（浄瑠璃の或部分を除く外は）おほむね理想詩の門に属し、就中和歌と称せられたる限は叙情詩のいと小なるものにて、大かたは一身の哀歎（神祇釈教悲無常の感）を詠するに止まり未だ嘗て現実を解脱せるはあらず。試みに想へ、古來億万の歌集の中風情を現実の外に馳せて彼の形而上の人間を詠じ、若くは形而上の造化を歌へるもの、そも果して幾ばく首かあるべき。予は元より或る論者の如く其短きに過たるをもて和歌の失とはせず、又其叙情に偏れるを憾とはせず、只其現実象に拘々として大虚象を知らざるものの如きを惜しむのみ。

III 爰に我友梅花道人といふ斯道の道士あり、此のたび新体詩建立の大誓願を發起して「梅花詩集」一卷をあらはされき。予承けて之を読むに、道人の觀念する所頗る彼の仏家若くは蕉門の詩人に似て、をさをさ形而下の物象を解脱し造化を釈せんと試みたるが如き跡あるは、先づよろこぶべき道人の特色なりけり。

IV 予は敢て觀念のみを崇めてそを歌詩なりといふものにあらず、技術と觀念とを兼具して始めて詩人あるを知れるものなり。併しながら予が叙情派の詩人に向ひて望む所の技量は他の造化派の詩人に向ひて望む所のもの程には多大ならんことを要せず。さるは彼れ造化派の詩人には常に全く自我を脱して各種の性情を靈写すべき至難の大任の在るが故に多般の大技量を要すべきなれども、此れは懷抱の主觀相（觀念）を取りて之を有形にし之を總合し之を靈活に描写し得て他を感孚すれば足れるが故に、技能比較的に單純にして強ち偉大なるを要せざるなり。

V 今や梅花道人は前派に属せずして後派に属す。熟々道人の作を検するに、其「九十九の嫗」や其「静御前」や之を写性情の韻文としても多少の趣味なきにあらず、其宗とする所を叩かば彼等が本来の性情にあらで寧ろ作者が之を仮りて理想を歌ひたる所にあるものの如し。予は道人が叙情に巧にして理想を描叙するに妙なるを認むると共に、他（即ち人間の性情）を靈写することに短なるを認め、3を爰に批難するを憚らざるなり。是予が道人を評するに其想に重きを置き其想を批判せんとする第一の理由なり。

（坪内逍遙「梅花詩集を讀みて」による）

注 マアロウ……イギリスの劇詩人マロー。

ウラーツワース……イギリスの詩人ワーズワース。

ホーマル……古代ギリシアの詩人ホメロス。

ギョーテ……ドイツの詩人・作家・劇作家ゲーテ。

感孚……まごころに感ずること。まごころが通じあうこと。

問一 A の文章には次の一文が脱落している。入るべき最も適切な箇所を〔イ〕〔ホ〕から一つ選び、解答欄にマークせよ。

いずれにしろ世相詩人の評価は変わらないのである。

問二 A の文章の空欄 1

に入る適切な語句を、B の文章の段落 I より十五字以内で抜き出し、冒頭の五字を記述解答用紙の所定の欄に記せ。句読点も含み、振り仮名がある場合は省略してよい。

問三 Aの文章の空欄 a には、「理想」「世相」のいずれかが入る。その組み合わせとして最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ	a	理想	b	世相	c	世相	d	理想	e	世相
ロ	a	世相	b	理想	c	理想	d	理想	e	世相
ハ	a	理想	b	世相	c	世相	d	世相	e	世相
ニ	a	世相	b	理想	c	世相	d	世相	e	理想
ホ	a	理想	b	世相	c	理想	d	世相	e	理想

問四 Bの文章の段落I～Vにそれぞれ小見出しを付けるとすると、次のイ～ホのどれに当たるか。適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。ただし同じ記号を二度以上用いてはならない。

- イ 日本の伝統詩歌への批判
- ロ 中西梅花への批判
- ハ 中西梅花への評価
- ニ 叙情詩人と世相詩人の違い
- ホ 叙情詩人と世相詩人の技量

問五 Bの文章に傍線部2「予が叙情派の詩人に向ひて望む所の技量は他の造化派の詩人に向ひて望むものの程には多大ならんことを要せず」とあるが、その意味として最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 自分は造化派の詩人に叙情派の詩人ほど多大な技量を求めている。
- ロ 自分は叙情派の詩人に造化派の詩人ほど多大な技量を求めている。
- ハ 自分は造化派の詩人に叙情派の詩人ほど多大な技量をもってはしくない。
- ニ 自分は造化派の詩人に叙情派の詩人と技量の多寡を比較することを求めている。
- ホ 自分が叙情派の詩人に求める技量は造化派の詩人に求めるものと多寡において違いはない。

問六 Bの文章の空欄 3 には、中西梅花に対する逍遙の判断が入る。最も適切な表現を考え、自分の言葉で二十字以上二十五字以内で記述解答用紙の所定の欄に記せ。ただし句読点も一字と数え、「叙情派」「造化派」「詩人」の語句を必ず用いて、末尾を「～こと」という形でまとめること。

問七 Aの文章は、Bの逍遙の文章についてどのように評価しているか。次の中から最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 逍遙は独自の認識法によって叙情詩人・世相詩人を分けているが、その分類には成功していない。
- ロ 逍遙の言うドラマとしての詩歌論の本質には、私の解脱が存在するが、その達成は困難なものではない。
- ハ 逍遙は理想詩人や理想詩として伝統的詩歌を挙げて、主情主観そのものを美として位置づけている。
- ニ 逍遙の文学批評の基準は詩歌のようなジャンルに合わないため、彼による和歌批判には無理がある。
- ホ 逍遙による中西梅花詩集への批判は、結局のところ自己矛盾を生じ、当を得たものとなっていない。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

コロナ禍の中、滔々^{たうたう}と説かれる「新しい生活様式」なる語の響き^Aにどうにも不快な既視感があつた。「新しい日常」という言い方もあつた。それは当然だが、政治が人々の「生活」や「日常」という私権に介入することの不快さとして何より、ある。その不快さは、かつての「戦時下」を想起させるからでもある。むしろ、戦後生まれのぼくは満州事変から日中戦争、太平洋戦争と拡大した十五年戦争（この期間を本書では戦時下と呼ぶ）を生きてはいない。歴史の中の時間に過ぎない。しかし、その現実の戦争を当事者として経験し得なかった者の目から戦時資料を読んでいくと、それはそれでいくつかの発見がある。

その一つが、今のSNSで弄^{もよほ}ばれる勇ましい戦時下の語彙とは違う戦時下のことばがある、ということだ。

I

その過程を少し、具体的に確認しておこう。

戦時下の日本で、近衛文麿^{このゑふまろ}が第二次世界大戦への日本の参画^{はま}を睨^{にら}みその準備のため、大政翼賛会を発足させたのが一九四〇（昭和一五）年である。それを「新体制運動」ともいい、その実現のために発足した大政翼賛会が主導したので「翼賛体制」ともいう。

そして、第二次近衛内閣が「新体制運動」を開始した際、その「新体制」は経済、産業のみならず、教育、文化、そして何より「日常」「生活」に及んだのである。その事実は大政翼賛会の理論的基礎を作った昭和研究会の示した新体制建設綱領には「新生活体制」の項があり、こう説かれることでも明らかだ。

内外の非常時局を突破し、日本の歴史的使命たる東亜自立体制建設のため、全体的協同的原理の上に国民生活を一新し、国民に犠牲と忍耐と共に新たな希望と向上とを齎^{もたら}すべき新生活体制の確立を期すること。

何故、「国民生活」を一新しなくてはいけないのかといえ、それは大政翼賛運動の「実践場」が「日常生活」（「大政翼賛会会報」第二号）であるからだ。つまり国を挙げて「国民」たちに「日常生活」を「一新せよ」と迫ったのがかつての戦時下における翼賛体制だったのである。

第二次近衛内閣は、一九四〇年七月二二日、大東亜新秩序建設を掲げ、発足した。前内閣を率いた海軍出身の米内光政^{よないみつ}の総辞職を受けてである。

発足直後、まず閣議決定された「基本国策要綱」は、「日滿支の強固なる結合を根幹とする大東亜の新秩序建設」、いわゆる大東亜共栄圏として、東アジア世界の社会システムの書き換えを目標^{もくひ}とするものであつた。「新」という語は、まず東アジア全体の作りかえを意味する語であつたことは忘れてはいけない。

この時点では「生活」の位置付けは小さかつた。「要綱」に示された、五項目からなる「国家態勢の刷新」を確認すると、一つめの国民道德の確立と科学的精神のシンコウ（「科学」も戦時下国策用語であることに注意を促しておく）という精神面、二つめの国政の統合的統一という大政翼賛会発足を想定した政治システム更新の次に来る、三つめの、経済の統制、自給・合理化を説く国防経済の確立の項で「生活」に言及される。この項は、さらに小項目九つからなり、その五番めによく「国民生活必需品特に主要食糧の自給方策の確立」とある。「生活」はこの時点では、食糧自給の文脈で言及されるに過ぎなかつた。

しかしそれが近衛首相の声明（八月二八日）では大きく変わる。

高度国防国家の体制を整へねばならぬ、而して高度国防国家の基礎は強力なる国内体制にあるのであつて、ここに政治、経済、教育、文化等あらゆる国家国民生活の領域に於ける新体制確立の要請があるのである。

（『東京朝日新聞』夕刊一九四〇年八月二十九日）

改めて「新体制」という文脈で「生活」という語が位置付けられたのである。

ここから「新体制」とは「高度国防国家」、つまり全面戦争に対応しうる国家体制構築のための、「国民生活」の全面的な更新を目論むものだとなる。文字通り「新体制」は、「国家国民生活の領域」全てに及ぶのである。また、「政治、経済、教育、文化」も全て「国民生活の領域」にホウセツ²されていることに注意したい。つまり、近衛新体制とは「生活の更新」という具体的手段による「国家体制の更新」なのだと言明されるのだ。

第二の「国民生活」への言及は、大政翼賛会を意味する「国民組織」とは「国民が日常生活に於いて国家に奉公する」もので、その組織は文化・経済などの「各領域」に広く樹立されるべきだと説くくだりでなされる。それは具体的には、別の章で検証する住民組織「隣組」に加え、この先推進される文化芸術などの分野ごとの統一団体や産業報国会など、「職域」ごとの組織化を想定している。その各領域の組織と「国民生活」の関わりをこう説く。

国民をして国家の経済及文化政策の樹立に内面より参与せしむるものであり、同時にその樹立されたる政策をあらゆる国民生活の末梢^{まつしやう}に至るまで行^{おこな}わらせるものなのである、かかる組織の下に於いて初めて、下意上達、上意下達、国民の総力が政治の上に集結される。（同）

「内面の参与」というのは、つまり「新体制」の究極の目的が、国民の内面^Bの動員にある、ということだ。ここは重要である。そして職場・職業ごと・地域ごとの組織化が必要を介してなされるのが、「上意下達」と併記される「下意

上達」という、下からの参与である。この「下意上達」という Ⅱ もまた新体制用語としてよく用いられるものだ。ここから、近衛新体制が制度上は「参加型ファシズム」を目標とするものであることがうかがえる。

これを受けて、新体制準備会が作成した新体制綱領では「国内新体制」として「新経済体制」「新産業労働体制」「新共時体制」「新文化体制」「新生活体制」「婦人並に青少年問題に於ける新体制」が改めて項目立てられる。一見「新生活体制」の位置付けは後退したかに見えるが、「声明」で「国民生活」と国家運営の双方向性が唱われたように、新体制の肝は「新生活体制」にある。しかも「国民」は「新体制」組織の最末端に配置された「隣組」と、これと同義の「隣保班」によって統治される仕組みである。「隣組」は、当時の文献では「細胞」とも表現される翼賛会という政治組織の最小単位で、決して牧歌的な隣近所ではないのである。

このように、新体制下では、国民は「国家」だけではなく、ナチスやファシスト党に模した一党独裁組織・翼賛会の下に位置付けられているのが特徴だ。しかも、それはすでに見たように、「下」つまり「国民」は「末梢」として「上」にただ従うのではなく、C V I D B A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A C K P A

問十二 傍線部C「フィードバック可能な参加型の組織」の本文における説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 国民が積極的に政策を提言し、社会体制に反映することが可能な組織
- ロ 国民が上からの政策に対し、協力的に実践で応じることが可能な組織
- ハ 国民が政策を自由に検討し、批判や要望を提出することが可能な組織
- ニ 国民が任意に加入し、行政と対等に政策を実践することが可能な組織

問十三 本文の趣旨と合致するものとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 筆者は第二次近衛内閣の政策を検討し、国民の積極的な参加を受け入れる当時の翼賛的な組織化に柔軟な双方向的な意志の伝達形式があったことを肯定している。
- ロ 筆者は「新しい日常」や「新しい生活」という語で強調される先進性が戦時中にもあり、コロナ禍での使い方は戦時の翼賛体制の二番煎じにすぎないことを批判している。
- ハ 筆者はファシズムというものの本当の恐ろしさが、強権的な国民の抑圧ではなく、一見我々に身近な日常の暮らしの中から国民を自発的に誘導するものであると指摘している。
- ニ 筆者はコロナ禍で提唱された言葉に不快感を覚えているが、それは戦時下と同じく、牧歌的な生活共同体が余りにも政治的に洗脳されやすい危険性があるためだと不安視している。
- ホ 筆者は戦時中のスローガンのうちにコロナ禍で提唱された標語に繋がるもの認め、当時の勇ましい戦争賛美の語彙は現代社会でも若者にファシズムを刷り込む力があると警戒している。

問十四 傍線部1・2のカタカナの部分の漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（楷書で丁寧に書くこと）。

(三) 次の甲・乙・丙の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

甲「次の文章は、森正人著『竜蛇と菩薩 伝承文学論』(二〇一九年)の一節である。」

竜宮は異境の一つである。したがって、竜宮に関する伝承はほとんど例外なく異境訪問譚として語られることになる。異境は人間界とは異なり、その世界独特の秩序によって支配され、この世と正反対の、あるいは一見この世に似ていても何か重大な相違のある空間として形象される。特に竜宮は豪華絢爛たる宮殿をそなえ、人間界にない貴重な宝物に満たされた世界であった。

たとえば、『今昔物語集』卷十六第十五「観音に仕る人、竜宮に行きて富を得る語」は竜宮という空間の景観を具体的に描写する日本の文献としては古いものの一つであろう。

微妙く荘り造れる門に至れり。(中略)重々に微妙の宮殿共有て、皆七宝を以て造れり。光り耀く事無限し。既に行畢て、中殿と思しき所を見れば、色々の玉を以て荘りて、微妙の帳・床を立てて耀き合へり。

この描写は、『太平記』卷十五、藤原秀郷が訪れたという琵琶湖底の竜宮もほぼ同趣である。このように類型性が見られる背景には、『海竜王経』などの仏典の表現の影響がある。

異境を訪れる人間は、偶然そこに足を踏み入れるのではなくて、特別の資質を具えて、

I 存在であった。

『太平記』卷十五によれば、依藤太こと藤原秀郷が竜宮に招かれたのは、人に抜きんでた剛胆ゆえであったと語られる。藤太は、勢多の橋の上に横たわる大蛇の背を怖れることなく踏んで通った。その後、怪しげな小男が現れて、年来の自分の敵を討つて欲しいと助力を乞う。秀郷は、琵琶湖の中の竜宮城に案内され、そこに攻め寄せてきた百足を弓矢で倒し、後に三井寺に施入されることになる鐘、武器など多くの宝物を与えられて帰還する。

無限の富を蔵する世界、それが竜宮であった。そのような竜宮は、『法華経』提婆達多品十二、娑竭羅竜王の娘が三千大千世界にも値するという如意法珠を釈迦に捧げることからも知られるように、比類のない宝物があると考えられていた。したがって、秀郷が、その呼称「田原」ともかわるところの、中に納めた物の尽きることのない「依」を竜から得たと語られているのも自然のことといえよう。

類話のいま一つは、『今昔物語集』卷二十六第九「加賀国の蛇と蛭と諍ふ島に行きたる人、蛇を助けて島に住む語」で、英雄が竜宮に赴き異類を助ける説話の古いかたちを示すものである。霊蛇に助力するのは加賀国の漁師たちで、不思議な風に引き寄せられて上陸した島で、沖の島から攻め寄せて来る百足を退治するのである。その島は無人であつて、蛇の勧めにより漁師たちは家族を引き連れて島に渡り、そこに住みついたという。島の主の本体は蛇とされているが、霊力をそなえた存在であることは、人の姿になることができ、風を支配する力を持つところに明らかである。ではこの大蛇の霊力の中核となっているものは何であろうか。それは、人間に富をもたすところにある。その島には滝があり、大蛇は「田可作所多かり」と言つて、漁師たちに、後に猫ノ島と呼ばれることになるその島への移住を勧める。この言葉から推し量れるように、この蛇は A であつたとみてよい。 A とはつまり竜神ということになるが、中国的な竜の観念あるいは「竜」という文字やその観念が日本に持ち込まれる以前の古い農耕神の姿を留めているのではなからうか。

それは、秀郷が竜宮から持ち帰った俵とも通う。俵は通常稲藁で編まれ、またその中に入れるものといえ、一般的には II であろう。御伽草子の『依藤太物語』には、その俵から「よねを取りいだすに、是もつひにつきせず」と明瞭に記す。加賀の島に住みついた者たちも、秀郷も等しく A (竜神)の霊力を分かち与えられ、その保護を受け続けることになったとみてよい。

竜の危難を救つてやり竜宮に招かれ、宝物を得て帰る説話といえ、前に挙げた『今昔物語集』「観音に仕る人、竜宮に行きて富を得る語」もそうであつた。この説話の主人公は、小蛇実は竜王の姫を助けるという慈悲の行いによって竜宮に招かれ歓迎され、打ち欠いても打ち欠いても減ることのない金の塊を得て帰ってきた。これに酷似する説話が、『諸経要集』卷六および『法苑珠林』卷九十一に載る。『今昔物語集』は、これを源流とし日本に舞台を移して翻案した伝承を拾い上げたとみてよい。

宿敵と争う竜に助力し、その恩に報いられる説話は中国にもあつた。『捜神後記』卷十に載るもので、山中の小屋に狐師が泊まっていたところへ、黄衣白帯を着けた長身の人が訪れる。それは実は白蛇で、明日黄蛇と戦うことになっていると告げ、助けを求める。翌日大蛇同士が激しく争うのを見て、狐師は黄蛇の方を弓矢で倒した。白蛇は一年間多くの獲物を約束し、その通りとなつて、狐師は III ために命を落とすこととなつた。

類話が『今昔物語集』卷第三十八「海の中にして二つの竜戦ひ、狐師一つの竜を射殺して玉を得る語」として載る。相争うのは青と赤の竜であつて、狐師は青竜に味方して、赤竜を弓で射る。狐師は青竜から玉を得て、大いに富み栄えたとされる。『今昔物語集』の説話が右の『捜神後記』に淵源することは疑いないが、直接依拠したとは認められない。この事例が単純に中国の文献から日本の文献への引用、あるいは机上の翻案という関係とも見なしがたいことは、日本における類話が多種にわたることから推し量ることができよう。

注 施入……寄進する。

乙「次の文章は、甲に引用される『太平記』卷十五の一節である。」

湖水の浪を分けて水中に入る事五十余町、ここに一つの樓門あり。開いて内へ入るに、瑠璃の沙厚く、玉の甃暖かにして、落花自づから繽紛たり。朱樓・紫殿・玉の欄干、金を鏤にし、銀を柱とせり。その壯觀、奇麗、いまだ曾つて目にも見えず、耳にもきかざりし所なり。この怪しげなる男、まづ内へ入つて須臾の間に衣冠正しくして、秀郷を客位に請ず。左右の侍衛の官、前後繁花の粧ひ、善を尽くし美を尽くす。酒宴數廻に及んで、夜すでに深ければ、敵の寄すべき程になりぬと周章騒ぐ。秀郷は、一生涯が間、身を放たで持ちたりける弓は、五人張に闊弦かけてくひしめし、矢は十五束三伏に拵へて、鏃の中子を管本まで打透にしたる箭、ただ三筋をたばさうで、今や今やとぞ待つたりける。夜半過ぐる程に、雨風一通り過ぎて、電の激する事ひまなし。しばらくあつて、比良の高峰の方より、続松二、三千が程二行にとほして、中に鳥の如くなる物、竜宮城をさしてぞ近付きける。事の体をよくよく見るに、二行にとほしたる続松は、皆己が左右の手にとほしたりと覺えたり。あつばこれは蛇の化けたる物よと心得て、矢比近くなりければ、件の五人張に十五束三伏の矢を打ち番ひて引きしり、忘るるばかり堅めて、眉間の真只中をぞ射たりける。その手筈鉄を射る様に聞えて、箭を返してぞ立たざりける。秀郷一の矢を射損じて安からず思ひければ、二の矢を番ひて一分も違へず、わざと前の矢所をぞ射たりける。この矢も先の如く跳り返りて、少しも身には立たざりけり。秀郷二つの矢をも皆射損じて、憑むところは矢一筋なり。何がはせんと思ひけるが、きつと案じ出だしたる事あつて、この度射んとしける矢さきに、玉沫を吐き懸けて、また同じ矢所をぞ射たりける。この矢に毒を塗りたる故にやよりけん、また同じ矢坪を三度まで射たる故にやよりけん、この矢眉間の只中を通りて、喉の中まで羽ぶくら責めてぞ立つたりける。二、三千見えつる続松も光忽ちに消えて、鳥の如くに見えつる物の、倒るる音大地を響かせり。立ち寄りてこれを見るに、果して百足の蛇なりけり。竜神はこれを悦んで、秀郷を様々にもてなしけるに、巻絹一疋・鎧一領・頸結俵一つ・赤銅の撞鐘一つとを与へて、「御辺の門葉に必ず將軍になる人多かるべし」とぞ示しける。秀郷都に帰つて後、この絹を切つて使ふに、尽くる事なく、俵は中なる納物を、取れども取れども尽きざりける間、財宝も倉に満ちて、衣裳身に余れり。故にその名を俵藤太とはいひけるなり。

注 續紛……みだれ散る。 五人張……四人で弓を曲げ、残る一人が弦をかけた弓。強弓。

闊弦……漆を塗るなどして強固にした弓弦。

十五束三伏……拳十五個と指三本分の長さ。遠距離を射るための大矢。

中子……鏃の根もと。鏃(矢の竹の部分。矢柄)の中に入る部分。

管本……矢筈(矢の末端の、弦を受ける部分)の根もと。

羽ぶくら責めて……矢羽のつけぎわまで入るほど、矢を射込んで。

丙「次の文章は、甲に引用される『搜神後記』卷十の一節である。文中には、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。」

吳末、臨海人入山射獵、為舍住。夜中、有一人、長一丈、著黃衣・白帶。徑來謂射人曰、我有讐、剋明日當戰。君可見助、當厚相報。射人曰、自可助君耳。何用謝為。答曰、明日食時、君可出溪迎。敵從北來、我南往。応白帶者、我、黃帶者、彼射人許之。

明出、果聞岸北有聲。狀如風雨、草木四靡。視南亦爾。惟見二大蛇、長十余丈、於溪中相遇、便相盤繞。白蛇勢弱、射人因引弩射之。黃蛇即死。日將暮、復見昨人來。辭謝云、住此一年獵、明年以去、慎勿復來。必為禍。射人曰、善。遂停一年獵、所獲甚多、家至巨富。

數年後、忽憶先所獲多、乃忘前言、復更往獵。見先白帶人、告曰、我語君勿復更來、不能見用。讐子已大、今必報君。非我所知。射人聞之、甚怖、便欲走。乃見三鳥衣人、皆長八尺、俱張口向之。射人即死。

注 臨海……中国浙江省の地名。 剋……きめる。

弩……ばね仕掛けで射る弓。 辭謝……感謝を述べる。

問十五 甲の文章における空欄

I

にあてはまるものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 秩序に支配される ロ 武力に優れている ハ 魚類と交信できる
 ニ 異境から選ばれた ホ 慈悲に溢(あふ)れている ヘ 類型性が見られる

問十六 甲の文章における空欄

A

には漢字二字の同じ語が入るが、筆者はこれを傍線部1「古い農耕神」ではないかと考えている。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 生命力の強い蛇に象徴される、傷病を治療する「医神」
 ロ 警戒心の強い猫に象徴される、孤島を守護する「福神」
 ハ 足の多い百足に象徴される、戦闘能力に優れた「雷神」
 ニ 儒教伝来以前からあった、子孫繁栄をもたらす「女神」
 ホ 仏教伝来以前からあった、豊年満作をもたらす「水神」
 ヘ 道教伝来以前からあった、不老長寿をもたらす「火神」

問十七 甲の文章における空欄

II

に入る漢字二字の語を、記述解答用紙の所定の欄に記せ(楷書で丁寧に書くこと)。

問十八 甲の文章における空欄

III

に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 富を得るが、明年以降はここに来てはいけないという戒めを破った
 ロ 弓矢に唾を吐きかけたが、その毒によって自ら病となつてしまった
 ハ 家に巨富を得るに至つたが、それにより驕り高ぶる気持ちが昂じた
 ニ 白蛇の精と結婚したものの、他の魅力的な女性と交わつた裏切りの
 ホ もともと敵であつた黄蛇の子孫と組んで、白蛇を殺害しようとした
 ヘ 数年間山中の小屋に留まり獲物を捕つたが、八尺の大男に襲われた

問十九 甲の文章に引用される『今昔物語集』

以前に成立したと

考えられる作品の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 日常的な話題や癪(さ)取りじいさん・舌切り雀など著名な話を収める説話集。
 ロ 慶滋保胤『池亭記』の影響を受け、和漢混淆文で書かれた鴨長明の著作。
 ハ 後一条天皇から高倉天皇にいたるまでの歴史を紀伝体で記した歴史物語。
 ニ 神武天皇から平安時代の仁明天皇までの歴史を編年体で記した歴史物語。
 ホ 藤原定家が、奈良時代から鎌倉時代初期の歌人の歌を百首撰んだ秀歌撰。
 ヘ 承平・天慶の乱における平将門の乱の有様を変体漢文で描いた軍記物語。

問二十 乙の文章における傍線部2「たばさうで」

の文法的な説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ マ行四段活用自動詞の連用形と接続助詞
 ロ マ行四段活用他動詞の連用形と接続助詞
 ハ マ行下二段活用他動詞連用形と接続助詞
 ニ マ行四段活用他動詞の未然形と接続助詞
 ホ マ行四段活用自動詞の未然形と接続助詞
 ヘ マ行下二段活用自動詞未然形と接続助詞

問二十一 乙の文章における傍線部3「御辺の門葉に必ず將軍になる人多かるべし」とあるが、竜神はどうしてこのようなことを言ったのか、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 秀郷の怪力により考えられないほど強い矢を放つたために、將軍が子孫に代々の警護を命じたから。
ロ 秀郷は人間界とは異なる世界である竜宮を訪れ活躍したことによって、超人的能力を獲得したから。
ハ 秀郷の智略と勇氣によって百足を退治したため、竜神が感謝して子孫を守護することを誓ったから。
ニ 秀郷は物が尽きることのない俵を竜から得たため、次々と將軍を輩出する家柄なのだと考えたから。
ホ 秀郷の武人としての資質を竜神は看破し、この能力は子孫にも受け継がれるだろうと見抜いたから。
ヘ 秀郷は白蛇の化身を助けたため、竜神はその報償として代々將軍となることを約束させられたから。

問二十二 丙の文章における傍線部4「我語君勿復更来、不能見用。」の返り点として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 我語君勿_レ復更来、不_レ能見用。
ロ 我語_ト君勿_二復更来、不_二能見用。
ハ 我語_三君勿_二復更来、不_レ能見用。
ニ 我語_レ君勿_ト復更来、不_二能見用_ト。
ホ 我語君勿_二復更来、不_二能見用。
ヘ 我語_レ君勿_二復更来、不_レ能見用。

問二十三 丙の文章における傍線部5「讐子」とは、どのような者のことをいうのか、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 秀郷の子 ロ 射人の子
ハ 百足の子 ニ 竜神の子
ホ 白蛇の子 ヘ 黄蛇の子

問二十四 甲・乙・丙のいずれかの文章の趣旨と合致するものを、次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 仏教の世界観では、竜宮に無限の宝物があると考えられ、七宝で光り輝く宮殿や寶石によって飾り立てられた室内調度品があると考えられていた。
ロ 異郷とは、この世界と似て非なる空間であるが、迷い込んで食事したり結婚したりすると、もとの世界に戻ったとしても、悲劇的な結末に終わる。
ハ 秀郷が琵琶湖水中の楼門に入ったところ、怪しげな男は宮殿内に入り、瞬時のうちに正装姿となり、夜半まで秀郷を酒宴の賓客としてもてなした。
ニ 比良山の上から、明かりが二列になって二三千ほど降りてくるのが見えたが、よく見ると左右の手に松明（たいまつ）を持ち整然と隊列を組んだ軍勢であった。
ホ 臨海の山の中に、黄色の衣に白の帯を着けた男が現れ、北と南の両方向からやってくる者の敵味方の区別が付きにくいので、気をつけるよう伝えた。
ヘ 射人に迫る三人の黒衣の巨人は、狩り場を荒らす者を警告する役割であったが、射人が恐れて逃げたため、大きな口に飲み込んで殺してしまった。

〔以下 余白〕

〈2022 R04162023〉

受験 番号	万	千	百	十	一
氏 名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。



(三)

--

問十七

(二)

--

問十四

(一)

--

問六

(一)

--

問二

(採
点
欄)

〈2022 R04162023〉

受験 番号	万	千	百	十	一
氏 名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

(三)

問十七

(二)

問十四

1

2

(一)

問六

(一)

問二

国

語
(記述
解答
用紙)